

# 専門職高等教育の質保証

## — 教職協働とマネジメント・ディベロップメント —

川口 昭彦

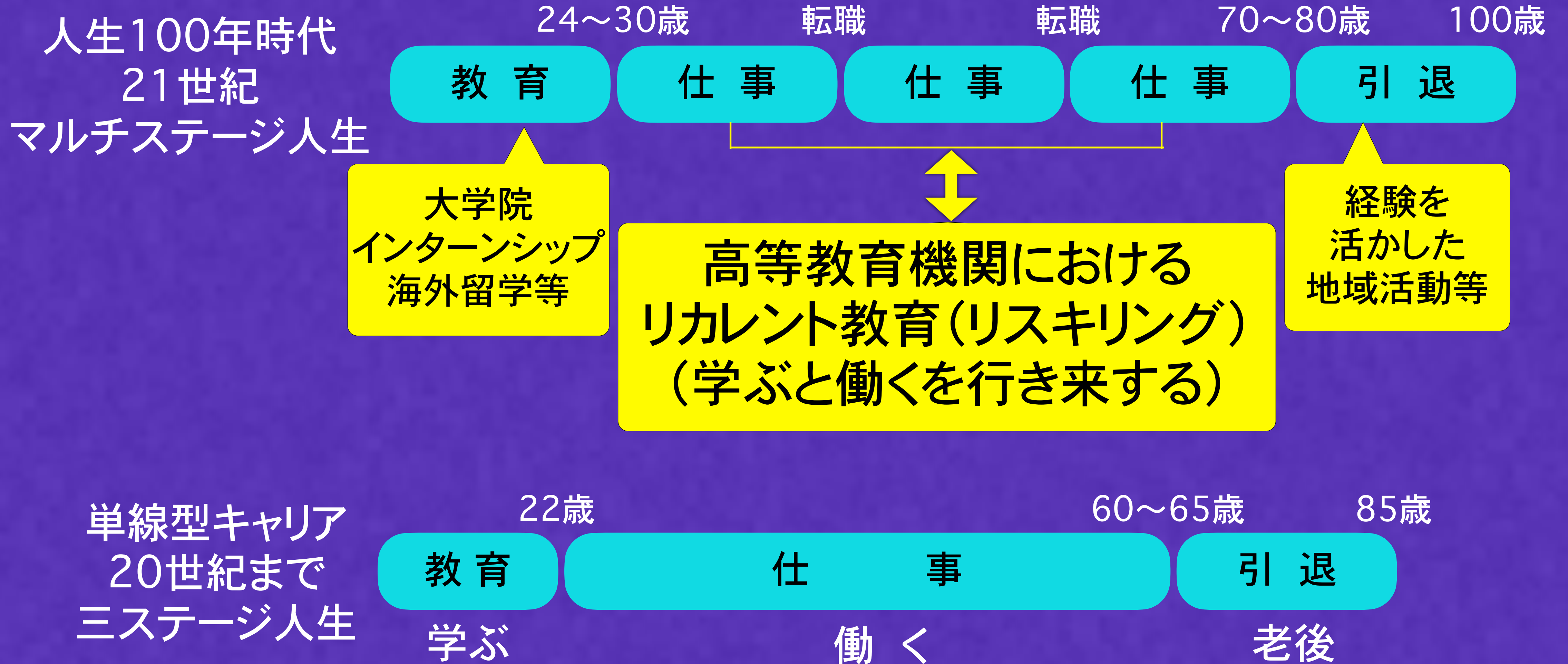
一般社団法人 専門職高等教育質保証機構 代表理事  
独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 名誉教授

# DX社会における専門職高等教育の質保証

- DX(Digital Transformation)社会(人生100年時代)の高等教育のあるべき姿?(高等教育の国際的歴史・進展から考える。)
- SDGs(Sustainable Development Goals)に対応できる専門職高等教育
- 教職協働とマネジメント・ディベロップメント(MD、今後の発展のために不可欠!)

参考資料：川口昭彦(一般社団法人専門職高等教育質保証機構編)『DX社会の専門職大学院・大学とその質保証』専門職教育質保証シリーズ、ぎょうせい、令和4年11月

# 単線型から多様なキャリア・パスへ





# マルチステージ人生（仕事観や人生観の変化）

- 学業、勤労、退職後という年齢による区分に基づく三ステージ人生から、年齢に囚われず、「学び」「働き」「休み」「遊ぶ」というマルチステージ人生へ変化している。
- 現在、65～69歳の人たちの半数は働いている（総務省 労働力調査 2021年）。
- コロナ禍で在宅勤務やリモート勤務などの展開によって、働き方の柔軟性・自律性が高まり、仕事観や人生観が変わってきている。
- デジタル技術を有効に活用しながら、主体的かつ自律的に人生を歩むことが重要となっている。
- 個人、企業、社会は、どのような意識で、何にどのように取り組むか？

# 大学変革の歴史

大学	世紀	概要
第一世代	12世紀～ 18世紀	中世の大学：教員と学生の協同組合としての大学。大学は単に特定の専門知識を教えるだけの機関ではなく、都市から都市へ遍歴する人々の知的生活が共同で営まれるコミュニティとしての性格をもっていた。
第二世代	19世紀～ 20世紀	近代の大学：研究と教育の一体化をめざしたフンボルト型大学。大学は、関連深い専門領域の研究者たちから構成される学部や学科（ファカルティ）の連合体である。フンボルト理念には、教員と学生の「双方向的学び」あるいは「教える自由」と「学ぶ自由」という視点が含まれていたが、基本的には教員主体になった。
第三世代	21世紀	現代の大学：多様化・複雑化する知識集約社会（アカデミック・キャピタリズム）の中で知的創造の基地として期待されている。教員中心でも、教員と学生中心でもなく、さまざまな知的専門職のネットワークを中心として、社会との連携、すなわち「学び」と「実務」の密接な連携が求められている。



# 中世欧州大学の崩壊

- 中世に誕生した大学は、中世が終わる頃(百年戦争終了時)から、近代知の発展にとって、主体ではなく周縁的存在となってしまう。
- 近代の自然科学や人文主義によって、社会認識の劇的変革が起こり出した時、大学は、その組織の硬直化・形骸化により学問的創造力を失い、君主権力の監督下での「エリート養成機関」となってしまう。
- 16世紀以降、大学に代わって社会の知的創造の基盤となったのは、活版印刷技術[グーテンベルグによる印刷術の発明(1400年代)]であった。この知の地殻変動の中で、大学は積極的な役割を果たしていなかった。
- 近代知の発展のためには、新たな知識生産・継承のシステムが不可欠であったが、ここでの主役は大学ではなく、軍事、医学、工学、法学などの専門知を集積・伝達する機関として発達した専門学校やアカデミーであった。

# 印刷メディアの時代へ

- 活版印刷の産業化が、知の生産体制に決定的な変化をもたらし、中世大学とは異なる方法で、越境的な知のネットワークを創造した。すなわち、知識人自身が「都市から都市へ遍歴する時代」は終わり、書齋や図書館における「書物の綿密な比較分析の時代」が到来した。
- 出版物を介することにより、新しい知識の統合・置換が促進された。従来からの異なる知同士の新たな結合によって、全く新しい思想体系が創出された。
- 「知の流通」という観点から大学と出版を比較すると、前者の組織・団体としての閉鎖性と後者のネットワークとしての開放性の違いが明白であり、印刷術が大学に替わって知識のより開放的な伝達・継承の仕組みとなった。
- 出版がメディアとして産み出す知のネットワークを支えたものは、「組織・団体」の論理ではなく、「市場」から「社会的説明責任」につながる論理であった。



# 大学から専門学校・アカデミーへ

- 16世紀後半になると、出版物の量的拡大によって図書館の重要性が増し、司書や歴史編纂者などの職業も登場した。
- 新しい知識人が目を向けたのは自然科学や人文主義であり、スコラ学的伝統をもった中世の大学とは異なっていた。
- 近代の新しい知に対応する制度として、硬直化した大学より柔軟に、実学的かつ先端的な教育が実施できる**専門学校**や**アカデミー**が、多様な分野で各地に設立された。
- 全体として大学はいわゆる「死に体」となって、18世紀初頭には専門学校やアカデミーが大学に代わる有力な教育研究の場となっていた。



# 大学の再生(第二の誕生)

- 18世紀には学問的創造の場として役割を終えて、解体論すら語られていた大学は、ナショナリズムの高揚を背景に、国の主要な知的資源と位置づけられた。そして、教育と研究の一致という「フンボルト理念」(19世紀初頭ドイツ)に基づいて、外部の要請に応える他律的な知と外部から独立した自律的な知を追求する国民国家型大学として復活した。
- 大学教育の目的は、学生に主体的な思考方法を学ばせることであって、際限なく知識を詰め込んだり、国家へのイデオロギー的な忠誠を誓わせることではない。学問的思考の手法を獲得することによって、個人は国家の単なる使用人ではなく、自律的な主体となることができる。
- このドイツ発信の新しい大学概念は、世界中に広がり、専門学校やアカデミー等の制度をも呑み込んで、今や最大の研究教育体制にまで成長し現在に至っている。

# フンボルト型(第二世代)大学の特徴

- 教育の核心部に、ゼミナールや実験などの研究志向の仕組み(アクティブ・ラーニング)が導入された。
- 教師だけではなく学生にも研究をさせるようにカリキュラムが再編成された。
- 知識は、定まった不動のものであるという考えを否定して、教師と学生の対話を通じて新たに生成されるものである。
- 新しい知識の構築過程で、既存の知識・認識の枠組み全体が変化していく。
- 学生が大学において学修すべき内容は、いかにして新しい知識を発見するか、いかにして知識を進歩させるか、そのための技法である。
- 教育の焦点は、すでに知っていることを教えるのではなく、いかに知るかを教えることである。すなわち、「内容」としての知から「方法」としての知への転換が重要である。



# 多様なリカレント教育（リスキリング）

キャリア教育	教育目標	教育内容
キャリア・ゲット (career get)	就職力	卒業(修了)後の就職を目的とした実践的な教育
キャリア・アップ (career up)	専門力	在職または転職後に、より高度な専門職への昇格に資する教育
キャリア・リフレッシュ (career refresh)	復職力	一定期間休職後に、元の職場・職種への復職に資する教育
キャリア・チェンジ (career change)	転職力	現在の職場・職種よりも有利な職へ転職に資する教育



# 学修者本位の高等教育： 入学から卒業・修了までの対応

学修者の  
キャリア・デザイン

## ディプロマ・ポリシー

- 学修者が期待できる
- 職務遂行能力(学修成果)
  - 自らが身につけた能力を社会に向けて発信

## カリキュラム・ポリシー

- 学生に対する
- カリキュラム・デザイン
  - アクティブ・ラーニングや情報通信技術を活用した少人数授業
  - 学修指導

## アドミッション・ポリシー

- 入学希望者の
- 学修履歴・習熟度および職業経験の確認
  - キャリア・デザインの確認
  - 職業適性の判断

卒業・修了

入学

多様な入学者およびキャリア・デザインへの対応が不可欠である。

# 21世紀の高等教育に求められる内容

- 専門分野ごとに閉じた分断的な発展は、社会に深刻な「危機」をもたらす可能性を秘めている。このことは、持続可能な開発目標(SDGs)が叫ばれていることから明白である。
- 高等教育に求められていることは、個々の知識・技能をどこまでも探究し追求すること自体ではなく、むしろ既知の知識・技能を各分野のみならず分野横断的に総合し組織化・構造化することである。
- このためには、トランスファラブルな(移転可能な、あるいは他分野でも応用可能な)知識・技術そして技能が求められる。
- したがって、「モノシリ」を社会に送り出すのではなく、イノベーションを誘発する技能(スキル)を身につけた人材を育成しなければならない。

# サービス業中心社会への変革とグローバル化

- 製造業中心の社会(20世紀)から、21世紀はサービス業中心の社会となっている(日本のGDPベースでも、従業員ベースでも、サービス業は、7割を超えている)。
- グローバル化のメリット：これまでであった障害がグローバル化によって取り払われることにより、チャンスが大幅に拡大する。→ **新しい分野に挑戦する人材**
- グローバル化のデメリット：関係する国、社会あるいは人が増えることによって、これまでは想像もつかなかった事態が起こる可能性が高い。不確定要素が増える。リスクが増大する。→ **リスクに柔軟に対応できる人材**



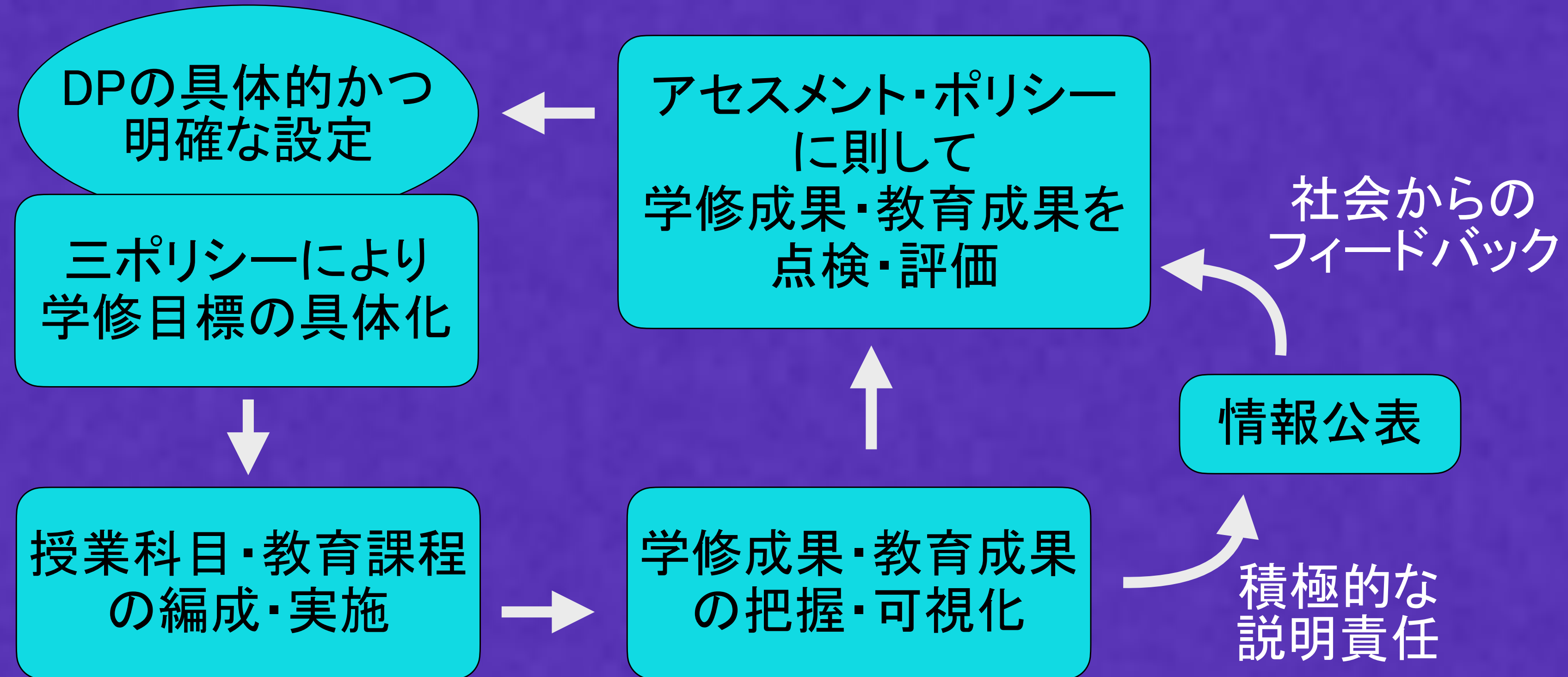
# SDGs (17目標の一部)

- 質の高い教育をみんなに (Quality Education)
  - ・ すべての人々へ包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進
- 働きがいも経済成長も (Decent Work and Economic Growth)
  - ・ 包摂的かつ持続可能な経済成長およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進
- 産業と技術革新の基盤をつくろう (Industry, Innovation and Infrastructure)
  - ・ 強靱なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進および技術革新の推進
- パートナリーシップで目標を達成しよう (Partnerships for the Goals)
  - ・ 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化

# 「タテ社会」から「ヨコ社会」へ

- 組織間に壁を作り、それぞれの内部で基本的に年齢を中心として、部分最適化を図る**タテ社会**の発想から脱却して、異なる組織間で個別利害を超えた横断的な人材流動の回路を備えた**ヨコ社会**の構築が急務である。
- 「知識・技能の継承・再生産」の教育から、「知恵の修得・創生」の学修への転換のためには、**アクティブ・ラーニング**と**ポートフォリオ**が重要なツールである。
  - ・ アクティブ・ラーニング：能動的学修(グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等)
  - ・ ポートフォリオ：学修者が学んだ内容を自ら評価することによって、「省察性」と「思慮深さ」を醸成
  - ・ 教員の役割が変化

# 教学マネジメントの概略



DP : ディプロマ・ポリシー

- ・ 教職協働に教学マネジメントサイクルの展開が不可欠である。
- ・ これに資するためのマネジメント・ディベロップメントが重要となる。